

増上寺第三十六世明蓮社みょうれんじや大僧正顯誉上人愚心祐天大和尚（二六三七—一七二八）以下尊称を略すは、現在でも独特の祐天名号や歌舞伎として演じられている累かさねの死靈解脫しりょうげだつ物語などで知られている近世の高僧である。多くの伝記が制作され、地蔵の化身として、利益のある名号の書き手として、今もなお信仰を集めている。

しかしながら、多くの伝記が交錯し、現代における祐天像は、浄土宗の僧侶としてよりも、むしろ死靈解脫などの奇跡を起こす、現代で言うならば、新興宗教の教祖のような立場で理解されているようである。例えば、都立大学の教授であった高田衛氏は祐天を称して「江戸の悪霊祓い師※1」と言うなど、その祐天像は極めて超現実化した一面もあると言える。

それに対し、浄土宗の立場から関山和夫先生は、死靈解脫の話は、浄土宗の説教譚であると反論しているが、十分に祐天像が説明されているとは言えない。※2

本研究の目的は、増上寺の大僧正となりえた祐天とは、実際はどのような人物であったのかを解明し、その実像を明らかにすることにある。今回は特に、浄土宗教団内部の祐天の立場などを探ってみたい。